

二〇〇九年度の日本国際政治学会研究大会が、十一月に神戸で行われた。その概要は、学会のニューズレター等で紹介されるが、その第八部会では「ユーラシア地域大国外交の比較分析：ロシア、中国、インド」というセッションが行われ、小生も討論者として参加した。報告はそれぞれの地域の専門家によってなされた。筆者は元来中国を主たる地域研究の対象としているが、三人の専門家がそれぞれの国家に関する報告を行ったのに対し、討論者は二人であったから、中国に関する報告を主たる討論の対象としつつ、3つの報告すべてについて問題点を提起した。もう一人の討論者である片原栄一氏も同様であった。それらの報告や討論について議論するのが本稿の目的ではない。フロアからの質問にあった「比較とは何か」という質問、そしてこの部会の構成を立案された岩下明裕氏、中居良文氏も考えておられた「比較研究」という問題について、この部会に参加した者として触発されたことを書いてみたいというのが本稿の目的である。

この部会のタイトルが「比較分析」とされているように、この研究会が「比較」という視点に基づいて立案されたことは確かである。しかし、三つの報告は、ロシアについては「安全保障」が、中国については「対外援助」が、インドについては「対大国外交」が焦点となっており、かつ二人の討論者も必ずしも三国の外交を比較するという視点に立ってはいなかったもので、一見比較の視点が明確でなかったことは事実である。そこでまず、この部会からいったん離れて比較とは何か、それが必要とされる背景は何かということから考えてみたい。

比較研究が重要であることは、ある問題について国家を行為主体として考えるとして、それぞれの国家の置かれた内外条件の異同を示してくれるという一点を考えただけでも明かであろう。国家以外の行為主体を考えても、対外政策以外の分野で考えても同様である。同じような国際環境にあった国家が、それぞれ別の対外政策を以て対処することはしばしば見られる。同じ国際環境、例えば「冷戦終了後」というような環境下で異なった対応が示された例は、数多く見られる。また類似の対応をした例も多数見られた。それらが異なった(もしくは類似の)対応をした原因を探求することによって、同じ国際環境と考えられていた状態もそれぞれの国家が置かれた条件下では異なってみられるということが明らかになるし、また、国内的条件が異なることによって、異なった対応がでてくることが明らかにされるであろう。既述のように筆者は、中国研究を主たる研究対象としてきたが、六〇年代と七〇年代の二回、東南アジアに長期滞在する機会を得たので、この時期を中心に東南アジアを対象とする学術論文を幾つか書いた経験を持っている。また、教育に関しては「国際政治」科目を担当したために、国際政治についての教科書を書いた。それだけの経験であるが、それらが国際関係の理解においても、一番の本業である中国研究においても、極めて貴重な経験であったことは身にしみて感じている。

若気の過ちというべきかも知れないが、中国における文革の影響がまだ生々しく感じられた頃、ある学会で、某氏が中国の「自力更生」という概念は、中国固有のものであるという趣旨の報告をされたとき、筆者は「発展途上国の多くは、用語は異なるし、成否の度合いも異なるが、自力で発展したいという意図は皆持っていると思うがどうか」という質問をし、報告者を困惑させたことがある。これは、東南アジア研究に手を染めていたからこそでた質問であり、もし筆者が東南アジア研究の経験がなく、中国だけに目を据えていたら某氏と同じような報告をしたかも知れないと思われる。一つの地域の研究をする上でも、比較の観点がいかに大事かということを痛感した経験であった。

ただ筆者の能力では上記のようなことを若い盛りにようやく半端ながら出来たにすぎず、しかも六〇年代七〇年代はそのせいだけでもないのであるが、月月火水木金金で一日十時間以上の各種研究活動に追われた。五〇歳の声を聞くときさすがにそれは続けられず、次第に東南アジアに関する研究は発表できなくなってしまった。つまり、比較研究というのは、個人の能力では大きな限界

があるということである。集団が共通の問題意識を持って、共同研究を行ってようやく達成できることであろう。しかし、基本的には今でもそうであるが、「自営業者」としての学者の集団ではなかなかそれが出来ないのである。共同研究はかなりなされているが、その多くが、同一地域の異なった分野の研究者が分業で一つの地域の全体像を描くという形を取ることが圧倒的に多いと思われる。つまり比較研究というものは、いうは易く行うのは難しい作業である。

筆者自身の経験から、もう一つ事例を挙げよう。これもはるか昔の話であるが、某学会でASEANに属する幾つかの国の対外政策の比較研究を共通論題に掲げた学会を開いたことがある。筆者がその司会者を務めることになった。軽い気持ちで引き受けて、事前の報告者との会合のようなものも開かなかった。当日になって驚いたことは、三人の報告者がそれぞれ自分の専門である一国の狭い枠内のみにおける対外政策の形成について話したことであった。三人の討論者もそれぞれの国の専門家で、報告者の議論の中の細かい問題点についてのみ報告者の意見をただすタイプの討論を行った。それぞれの国の研究を寄せ集めただけの報告会になってしまったのである。そういうものとして見れば、報告も討論も一級品であったと思う。しかし、「比較対外政策」という観点に誰も言及すらしなかった。

筆者は困惑したが、三つの報告にある特徴を見いだした。それは、対外政策の制定に当たって、国内的要因のみから説明する報告と、国際システムの制約からのみ説明する報告と、両者の混合的要因から説明する報告との三つにきれいに分かれていたのである。そこで、その点を指摘して報告者の意図についての回答を求めたが、それぞれに自分の説明の仕方を自明のものとして見ていたようで、はかばかしい回答が得られなかった。やむを得ず、フロアーの質疑に移ったところ、辛辣な質問が相次ぎ、報告者はそれらの質問には殆ど応えられず、細かい点についての質問にのみ回答した。つまり、比較研究を目玉として掲げた共通論題報告会としては完全に失敗したのであった。ついには「お前はなぜこの会議の司会者を引き受けたのか」という質問までで、筆者は「私は雇われマダムですから」と応えざるを得なかった。皮肉なことに、この「雇われマダム」がその後同学会の別の会議で司会者が困惑すると使う一種の流行語となってしまふ始末となった。

それ以後長い年月が経ち、筆者も必ずしも関連学会の報告や、発表される諸業績をフォローしているわけではないので、筆者が知らないだけで、比較研究が成功した例が多くでているのかも知れないが、はしなくも神戸の学会で「相も変わらぬ情景」に遭遇し、筆者自身も討論者として「比較」の観点を出そうとする努力は特にしない結果になってしまったので、古い記憶が蘇ってきた。このような小文を書こうと考えた次第である。

そこで、以上の感想が「当たらずといえども遠からず」であるという前提に立たせていただいて、今後の教訓を引き出してみたい。岩下教授がいつておられたと記憶するが、「ユーラシアの三大国の研究者が一堂に会しただけでも成功だった」というのが現在の状況に対する前向きで適切な評価だと思われる。比較研究を深めるためには、それぞれの地域の研究者が始終顔を合わせ、報告をしあい、お互いの議論を参考にし、自分の研究を進める上でのよき糧にしていくことが重要であろう。そうやって、共通の問題意識が醸成されていけば、少しずつではあっても比較研究・比較分析の芽が出て来るであろう。同じ分野の仲間内での議論はもちろん有益であり、一層深まることを期待するが、さらに前進するためには、視野を広げていく必要があるであろう。その結果、比較研究が進むならば、グローバル化する世界に対するわれわれの理解度は一段と進歩するのである。広い視野を持った優れた後進の努力に期待するところ大である。